

連載「わたしの福祉論」(100)

「ちよつといひ話」

社会福祉法人全日本手をつなぐ育成会

前理事長 藤原治

□はじめに

今回が、この連載「わたしの福祉論」の百回目になります。“継続は力なり”と言いますが、すごいものですね。私もこの間、十回書かせていただいています。

当初は知的障がい関係者が中心でしたが近頃は子育てや老人（私は高齢者より老人という表現の方が好きなので）問題の専門家のお話に拡がってきました。知的障がい問題が広く普遍的になってきたのでしょうか。今回百回目ですし“ちよつといひ話”楽しい話をさせていただきます。

現在から二十数年前のまだまだ知的障がい者の問題は少数派で偏見と差別の大きかった頃の話ですが、私はその頃より良い話、楽しい事を探し知的障がい者の理解者を増やそうと運動を進めていました。

□冒険旅行

私の息子が十八才になった一九八五年、お金の使い方や電車の乗り方を教えようと思つて冒険旅行と称して五人の青年と毎月一回小さな旅をした。兵庫県三田市から神戸

や大阪の梅田、なんば、観光地の奈良や京都へ行った。切符の買い方や乗換えなど本人たちが相談しながら工夫していた。私はリードせず、常に後に控えてサポートに徹した。その頃のちよつといひ話、楽しい思い出です。

○これどうぞ

Ｔ君は駅の自動販売機で清涼飲料水を買うのが大好きです。オロナミンＣのCMを見てこれを飲むと力が出ると思うのでしょうか。そして自動販売機が使えるのが自慢なのでしょう。オロナミンＣを買うとまず自分が飲む前に私に差し出すのです。こんなにおいしいものはまずリーダーに飲ませようというやさしい気持ちでしょう。私も喜んで少々飲みます。彼は嬉しそうに残りを飲みほすのです。そうそう彼はコーヒーマシンのブラックです。誰かが大人はブラック、砂糖たっぷりミルク一杯を入れるのは子供だと言ったのでしょうか。彼は大人になつてからはいつもコーヒーマシンのブラックです。

仲良しのU君にこんなことがありました。昼の楽しい食堂でハンバーグを食べかけた時、口から出したのです。異物でも入っていたのかなと思つたのですが、そうでもないようです。私に食べるとサインを出しました。こんなおいしいものは仲良しのリーダーにもあげようというのです。勿論私はびっくりもしましたが口にしました。同じ釜の飯、食べないと

信義にもとりましますから。食べ物のことと言えばデパートの大食堂のサンプルケースの前で、どれにしようか二十〜三十分かかることがあります。どれもこれもおいしそうですから迷つて当たり前です。しかし、その内にラーメン・うどん・定食とすぐに決められるようになりました。体験も重ねることにより知恵はつきまします。日常生活なら体験からびっくりするような力がついてきます。

□親子とも有名人になろう

今から三十年前の私の住んでいた三田市は三万六千人の小都市です。知的障がい者は少数派ですから市民は無関心です。私は存在を知ってもらうことが理解の始まりと思ひ、外へ外へ出るよう努めました。三田市手をつなぐ育成会のスローガンに“親子とも有名人になろう”を使つたことがあります。理解を進めることと本人が迷子（行方不明）にならないことを願つてです。

○光物どうぞ

これは三田市の市街地を離れた地域に住んでいるＴ君です。ある晩、こんばんはの声がして戸を開けると知らない人が立っていました。神姫（しんき）バスの運転手さんです。仕事からの帰り道、冬場には六時頃はもう真つ暗です。毎日同じバスに乗っているので運転手さんとも

顔なじみなのでしよう。夜、光に反射する光物を贈ってくれたのです。バス停から家までの道筋を心配してくれたのです。お母さんもありがたいことと新聞と神姫バスに投書したようです。良いことは広く知ってもらうことも大切でしょう。

これも神姫(しんき)バスの話です。息子の太郎の中学時代(今から三十年前)です。バスに乗ると、すぐに居眠りしてしまいます。近所の人もよく乗っていて降りる時を心配してくださるのですが、不思議とバス停の前で目を醒ますらしく近所で有名でした。しかし、知人も乗っていない時もあったらしく、いつもの時間に帰ってきません。心配していると一時間近く経って帰ってきました。終点まで行って、また引き返して来たようです。失敗しながら、いろんなことを覚えていきます。勿論、スクールバスはあるのですが社会に出ると民間バスに乗らないといけないので中学二年から民間バスに乗るけいこをしたのです。

□楽しい買い物・買い物上手

ある時、息子の太郎が「お父さん、背広買いに行こう」と私を誘うのです。「背広いうたら高いで」お金持つてるか「と尋ねますと」僕千円の背広買う」と言うのです。太郎はチラシを見るのが好きです

が、その日もこんな広告が入っていました。「二着目千円」です。お父さんが背広を買って、僕は二着目千円で買うと言うのです。負けたと思いました。勿論一緒に行きました。

冒険旅行での買い物風景です。太郎はネクタイが好きで何十本と持っています。沢山買い物すると、そのうちに上手になりデザインも私が見ても良いと思えるようになりまし。二十年程前のことですから、ネクタイも今程安くありません。壁に掛かっているネクタイは五千円以上で「ええけど高いな」となかなか値段にシビアでした。デパートでXmasセールでワゴンセールをしていました。千五百円だったと思います。あれこれと一生懸命探していました。私も新しいのを探していました。これがよいと一本引っ張り出しました。一本のネクタイの両端を父と子が手にしていました。太郎と私のセンスが一致したのです。

□友情

T君は太郎より五才下ですが、もう三十才を越すとどちらが兄か弟か判りません。本当に仲良しです。デイサービスやショートステイのことばも知らない頃から、何かの時の準備のため「お泊りごっこ」もしていました。二十五年程前のこ

とです。その仲良しの太郎が五年前に三十七才で亡くなりました。その年太郎の誕生日にT君は太郎の好きなお菓子をもってきてくれました。そして、命日には缶ジュースをもってきてくれ仏壇に手を合わせてくれます。今日まで五年間それは今も続いています。

□おわりに

私は現在七十一才です。四十数年前にダウン症の男児が授かり、共に三十七年歩んで参りました。その頃は障がいのある人を街で見かけることもなく、孤独で淋しい思いをしたものです。そして、元氣な成人だけでなく子供や老人の姿を街で見かけるように、障がいのある人も街で目にし、それが普通の姿だと言えるように活動をしてきました。それから勇氣ある親による親子で街に出る時代を経て、今は本人が一人で街を自転車で走り、喫茶店でコーヒを飲み、本屋やコンビニで買い物をしている姿が多く見られるようになりました。しかし私はまだ、障がいのある人で七十才、八十才代の人を街中で見ることはありません。年老いた人が自然にサポートされながらタウンライフを楽しんでいる社会が来ることを願っています。命ある間にそんな社会が実現するのが今の私の夢であります。